



TITLE:

明板冊府元龜に就いて

AUTHOR(S):

宇都宮, 清吉

CITATION:

宇都宮, 清吉. 明板冊府元龜に就いて. 東洋史研究 1936, 2(2): 136-152

ISSUE DATE:

1936-12-15

URL:

<https://doi.org/10.14989/145583>

RIGHT:

明板冊府元龜に就いて

宇 都 宮 清 吉

内 容

一、冊府元龜概要 二、流傳概略 三、明刊本體裁 四、明刊本の二大別と相互關係 五、康熙・乾隆重刊本 六、書肆に就いて。

一

冊府元龜一千卷は文苑華英や太平御覽等と共に宋代に編纂された類書の最大なるものゝ一である。此の書の眞價に就いては、夙に學者の認めてゐる所であり、内藤虎次郎博士も「冊府元龜は大體唐以前の歴史に於ては、多くは正史を拔書きしたに過ぎぬから、大した價値は無いけれども、唐から五代に掛けては餘程値打のあるものであることは、前々から専門家が認めてゐる」と言はれ、杉本直治郎氏も唐五代史に關する史料の見地から、やはり博士と同意見を述べてゐられる。而し唐五代史以前の

事に關しても、今日の傳本でその眞偽を疑問視されてゐる書物が、恐らく宋代の眞形のまゝ引用されてゐたり、又南北朝時代の各朝代史で今日闕文となつて最早や補ふに術なき史實が、やはり引用文として元龜中に残つてゐたりするので、此の點から考へれば、元龜は唐以前の史料としても相當の價値を持つた書籍であると言ふことが出来るであらう。

冊府元龜の緣起に關しては、已に杉本直治郎氏が可成り詳細に述べられてゐる通り、宋の眞宗の景德二年九月より大中祥符六年八月に至る凡そ八年の日子を費して、王欽若・楊億等が勅を奉じて編纂した勅撰書であり、又その宋初板本も同じく眞宗の天禧四年には完成してゐたのである。私は氏の考證に對して更に是非とも付け加へなければならぬと考へられるものは先づ無いと思ふ。た

ゞ氏が今日我が邦の靜嘉堂文庫に残存する宋板元龜の殘卷、及び鐵琴銅劍樓藏書目に錄せられてゐる五卷一冊の宋板本を以つて、南宋特に孝宗以後刊本ならんと考へてゐられる點が猶ほ私の疑問を存する所で、他日便宜を得て詳細に究明して見度いと考へてゐる。^⑥

註

- ①内藤虎次郎著 研幾小錄三三六頁、
- ②史學研究第七卷第二號。杉本直治郎著内閣文庫所藏の冊府元龜の刊本と寫本、
- ③例へば崔鴻撰の十六國春秋は、北宋に於て已に亡びた書物であり、現今の通行單行本は、屠喬孫の僞本であると四庫全書總目卷六十六に見へてゐる。然るに元龜奉使部卷六百六拾壹守節の部には、後燕の梁琛が秦に聘した記事があり、此の十六國春秋卷三十二と殆ど同一である。通行本が果して僞であるか眞であるかは別問題としても、少くも元龜に引用してある十六國春秋の文は明かに北宋時代の眞本に據つたものである。
- ④例せば通行本南齊書卷五八の東夷百濟傳は、初めの部分が缺文になつてゐて今日その眞文を見ることが不可能である。然るに丁度此の部分の一部に相當す可き記事が「冊府元龜卷九百六十三の南齊永明八年の條に引かれてゐる。而して少くも前後の場合から考へて、元龜の此の條は必ずや南齊書の闕文になつてゐる部分から引用されたものと考へなければならぬと思ふ。斯る例は朝鮮總督府發行の朝鮮史第一編

第三卷支那史料の冊中に相當見へてゐる。

⑤杉本直治郎前掲論文二百四十三頁―二百四十五頁 參看。

⑥史學研究第七卷第一號所載杉本直治郎著安南と朝衡十二、四十二頁―四十四頁 及び前掲論文二百四十五頁―二百四十六頁參看。猶ほ昭和八年十一月發行の靜嘉堂文庫宋刊本展覽會陳列書解説二十五頁―二十六頁 參考。

二

冊府元龜は其の卷帙が非常に鴻大である爲め北宋の初刊本以來南宋時代にも新刊監本が刊行されてゐるけれども、その流傳は廣くなかつたと見へて明季黃國琦と共に苦心元龜の校合に當つた文翔鳳でさへ、絶えて刊本の元龜を眼にする機會に巡り會はず、明刊元龜の叙文には、惟冊府元龜閱年六百。止一寫本。互相抄傳。

と言つてゐる。明季まで普通には刊本元龜が行はれず、主として抄本の形を以つて流傳したことは争はれぬ事實で、現今でもその遺物が殘存し、私の見ただけでも我邦には四通りの明抄元龜が缺本なくして存在するのである。^④文翔鳳・黃國琦兩人の校合刊行した明刊本元龜も勿論其の底本は一種の寫本であつて、成都の人楊慎が手校を施した内府抄本に據つたのである。^⑤此の明刊本は文翔

鳳叙・黃國琦崇禎壬午序によれば、相當苦心を拂つて刊刻されたものであるけれども、未だ／＼内容的に所謂魯魚帝后の謬極めて多く、他の抄本や就中宋刊本との校合を經ずしては、決して信用し得ない部分が相當に多いのである。

註

① 杉本直治郎著内閣文庫所藏の冊府元龜の刊本と寫本 二百四十五頁。又鉄琴銅劍樓宋金元本書影中。宋本書影子部四十六に收められた十三行本冊府元龜第二百四十九卷は、新刊監本冊府元龜と刻してあり恐らく南宋時代の新刻の板本であらう。

② 江西通志（光緒六年刊）卷七十一。人物志瑞州府の項。國朝の條によれば、新昌縣志を引いて王國琦字石公。新昌人。明崇禎進士授建陽令。政尚寬仁。歲侵捐俸。建倉積穀。以備賑隣邑。浦城巨寇數萬剽掠三省。國琦時攝浦事。用奇計降之。邑以寧。兩舉卓異。調山東滋陽。甲申二月召對稱旨。特授吏科給事。尋以母病辭。後終身不仕。僑寓金陵。年七十八卒。

とある。王國琦は正に黃國琦の訛である。明刊本の文翔鳳の叙に庚申視晉學。以石公黃子同西云々とあり、又後で述べる様にA類本に屬する明刊本には各卷毎に知建陽縣事臣黃國琦較釋とあり、徐鼎的小腆紀年卷四。崇禎甲申年三月壬子の條には、壬子。閩賊設僞官。授明降臣職。中略。新昌

黃國琦。授僞揚州府尹云々とあり、明刊元龜の黃國琦再言には（崇禎）甲申春余召對中左門。將自呈復痛時之已棘傷哉。とあり、江西通志に所謂王國琦が黃國琦の訛たるは明白である。此の人は文翔鳳の叙によれば、辛酉（天啓元年）以後文氏を指導者として苦心元龜校合のことにあたつた。

③ 文翔鳳は錢謙益の列朝詩集丁集卷十六によれば

翔鳳字天瑞三水人。萬歷庚戌進士。除萊陽知縣。調伊縣。遷南京吏部主事。以副使提學山西。入爲光祿少卿。不赴卒於家。とあり、明刊元龜の文叙の終りには「號太青」と言ふ印が印刷してある。文氏は相當の文學者で、五朝小説第九十九帙には彼の雲夢藥溪談（又續說郭司第十四所收）、續說郭司第三十八には朝京打馬格、皇明十六家小品には文太青先生小品等の諸作品あり、列朝詩集には詩も相當集められてゐる。黃國琦とは非常に親密なる交際あり、列朝詩集閩集四に文太青妻武氏附鄧氏事蹟と題して翔鳳の後妻鄧氏の小傳を記し、末尾に同傳の作者が黃國琦より鄧氏の後事を依頼せられたことを叙してゐる。曰く、江右黃國琦石公太青之桓譚也。告予（鄧氏傳作者）以鄧氏後事。云々。と兩者の關係について知る可きである。冊府元龜の校合に就いては黃國琦が其の再言の中で、劈頭第一に、

挾是書之僞纂者。余與太青師也、

と太書し辛酉（天啓元年）以來辛巳（崇禎十四年）に至る二十年間師太青と共に校合に苦心した次第を述べてゐる。正に文翔鳳の叙文と相表裏する記述である。

④ 一は内藤虎次郎博士所藏本。二は靜嘉堂所藏本。三及び四は内閣文庫所藏本である。

⑤楊慎は明史卷百九十二に、楊慎字用脩新（B類本元龜所載藏本姓氏作成。都人。中略。嘉靖十三年七月卒。年七十有二。慎幼警敏十一歲能詩。十二擬作古戰場文過秦論。長老驚異。

とあり、彼と冊府元龜との關係は文翔鳳の叙に、余輩。聞楊公用脩畜此書（元龜）。且經讐正。公歿書未知所歸。庚戌（萬歷三十八年）第後。中略。又遲十年。而竟得之。とある。彼の所藏の元龜は、B類本明板元龜に挿入されてゐる藏本姓氏の項に（藏本姓氏に就ては四七頁及同註八參看）よれば、内府抄本であつた。これが文氏の有に歸したのは萬歷三十八年後十年経てからで萬歷の末年に當る。されば文黃兩氏が此の本の校合を始めたのは天啓元年辛酉の年であるから、兩氏は楊本を入手と同時に其の校合に着手したのである。

⑥元龜の部門總數考及び目錄の部分の本文との校合は、已に岡本況齊の遺稿冊府元龜頤末攷（靜嘉堂藏本）に相當企てられてゐるが、最近民國の陳鴻飛と言ふ人も其れを爲し、相當見る可きものがある。（文華圖書館學專科學校季刊第五卷第一期所收冊府元龜引得參看）而し内容本文の校合は未だ行はれず甚だ遺憾とす可きである。最近宋板元龜の影印本が四部叢刊の一部として出刊される相であるが、それを期としてせめて宋明兩刊本の校勘記が作製せられたらと思ふ。

三

此の小篇は上に述べた様な諸點に就いて考研するのが

目的ではない。専ら今日普通に行はれてゐる所謂崇禎明刊本、及びその重刊本に就いて二三氣付いた點を述べ、それ等の間に何らかの系統をたてゝ見やうとするに止まる。

冊府元龜の明刊本は我々の知見する限り二種ある莫友芝の邵亭知見傳本書目卷十によると、

冊府元龜一千卷 上略明崇禎壬午刊本 此書有明刊半頁八行本

とあり、謂所崇禎明刊本は半頁十行の本であるが、別に莫氏に従へば半頁八行の明刊本も存する様である。此の本は如何なるものか私は現實に眼にしたことがない。莫氏の言つてゐる右の二種の明刊本の中、我々が普通に明刊本と言つてゐるものは、崇禎壬午刊のそれである。此の小篇で取扱ふ明刊本は、此の崇禎壬午明刊本及びその再刊、三刊以後刊の諸本である。

私の親しく觀察することの出來た明刊本元龜は、別表に示した様に六種類である。中で内閣文庫本（略稱岡本）の書番一四一八號四五八六號、五三四五號は杉本氏も已に明刊本と認められてゐるが、私も明刊本と認めて差支ないと確信する。但し一四一八號元龜が果して杉本氏の言はれる様に、崇禎壬午刊本であるか否やは後で述べること

① する。近衛家から京都帝國大學に寄託されてゐる所謂近衛本の中にある元龜と、靜嘉堂文庫所藏の元龜は殆ど同じ體裁の

(B 類本右傍空白)

の書番四五八六號及び五三四五號は全く同一の書物で些も異つた點を見出さぬ。羽田博士が所藏されてゐる元龜

は、本來

有る可き

第一冊目

の見返し

が脱落

し、又冊

府元龜據

考は後人

の抄補に

成り、そ

の順序も

内閣本の

四五八六

號、五三

四五號等

と異つて

藏本姓氏

李少文先生鑒正

冊府元龜

冊府一書、唐李肇撰、中輯成迄今六百

一十七年、宋王楙撰、相仍僕幼、馳墳

索風、時、經、年、載、苦心、一、無、餘、憾、茲、恭、至

天府、廣、和、人、間、前、見、宋、後、卿、媛、架、騰、李、鳳、英

少文謹識

繡堂梓

(A 類本朱印ナシ)

日試監察御史加一級加俸一級李嗣京となつてゐる。開本

の項の前に置かれてゐるが、恐らくこれは前記二閣本と

同一の系統の刊本であり、前述の考據の抄補は何等の理由によるか判断し兼ねるけれども、藏本姓氏との位置の顛倒は明かに後人の落度に出たものと思はれる。そこで以上六種の刊本は大體これを三つの大きな類に

分けて考へることが出る。圖表に示したA・B・Cの三段の分類はその略である。以下圖を基にして論を進めやう。

十行本明刊冊府元龜體裁略表

類別	原卷 順序		本	別
	順	本		
A	近	嘉衛堂	本	B
	靜	本	本	
	(い)	閣本	五四三五四五六號	
B	見返し有	見返し無	田本	C
	見返し有	見返し無	閣本	
	(ろ)	羽	本	
1	近本見返し有 靜本見返し無	見返し有	見返し無	見返し無
2	李嗣京崇禎壬午序	文翔鳳無年號叙	文翔鳳無年號叙	文翔鳳無年號叙
3	李嗣京崇禎十五年十一月 揭帖	黃國琦崇禎壬午序	黃國琦崇禎壬午序	李嗣京崇禎壬午序
4	冊府元龜考據 李嗣京述	黃國琦無年號再言	黃國琦無年號再言	黃國琦崇禎壬午序
5	藏本姓氏等	冊府元龜考據 (手抄)黃國琦述	黃國琦無年號再言	黃國琦無年號再言
6	冊府元龜考據 (黃國琦述)	藏本姓氏等	冊府元龜考據 黃國琦述	冊府元龜考據 黃國琦述

第一に表紙の見返しであるが、これは恐らく本來どの刊本にも、その第一冊目には備はつてゐなければならぬものであらう。而し靜嘉堂本、開本一四一八號及び羽田本には何れも缺失してゐる。今見返しのある近衛本と圖表B類(い)のそれを比較して見ると、次の點に相異の存するのに氣が付く。即ち(イ)兩者の見返し中央に大書してある冊府元龜の楷書、及び左傍下部にある五繡堂梓の文字が、全然同一の板木によつて印刷されてゐるにも關らず、近衛本の右傍上部に存する李少文先生鑒正と言ふ文字のみがB類(い)の方には全然削除され、空白のまゝとしてあることであり、(ロ)近衛本の方には、左傍上部に冊府一書云々と言ふ李少文謹識の文章が刻された朱印が一顆押捺してあることである。第二に序文類に關してであるが、これに就いても特に氣付くことは(イ)A類本には一切文翔鳳・黃國琦の叙及び序文・再言の類が姿を見せず、(ロ)それに反してA類本にはB・C類本の何れにも見えぬ崇禎十五年十一月 日付の掲帖が存し(ハ)C類本にはB類本に存せぬ李嗣京の序文がA類本のものと同然同一のものが存し、(ニ)A類本及びC類本には藏本姓氏の項を全く缺いてゐるに反しB類本は之を存し(ホ)元

龜考據の述者は、A類本に於ては、李嗣京となつてゐるのに、B・Cでは何れも黃國琦となつてゐる點である。

加之A類本とB・C類とは更に他の點で異つたものがある。圖表には示してないけれども、元來十行本明刊元龜に於ては何れも本文毎卷の卷初には必ず訂者正、參閱者校釋者、の名が列してあるのだが、それがB・C類に於ては總て、

(1) 淮南李嗣京參閱

(2) 西極文翔鳳訂正

(3) 豫章黃國琦較釋

となつてゐるのに獨りA類本に於ては、

第一卷は

(1) 巡按福建監察御史臣 李嗣京訂正

(2) 分守建南道布政使臣 胡維霖參閱

(3) 知建陽縣事臣 黃國琦較釋

となつて居り、以下第五卷まで(2)の條が一々異つた姓名になつてゐる。即ち

第二卷は

知長興縣事臣 夏允彝參閱

第三卷は

知閩縣知事臣 曹鼎臣參閱

第四卷は

知甌寧縣事臣 孫以敬參閱

第五卷は

新建縣舉人臣 戴國士參閱

而して第六卷以下は如上の順序で五卷目毎に右の五人が互に参閱者となつた様に印刻してある。即ち一六で終る數の卷は胡維霖。二、七で終るものは夏允彝三、八で終るものは曹鼎臣。四、九で終るものは孫以敬。五、十で終るものは戴國士となつてゐる。勿論間々夏允彝曹鼎臣戴國士の参閱す可き番の卷數に於て、胡維霖が代つて参閱者として刻せられ且胡維霖は往々胡爾慥となつてゐて恐らく維霖の字かと思はれるのであるが、而し其他の卷に於ては前述の様な順序は結局終卷變化する所が無い様である。

註

① 杉本直治郎著内閣文庫所藏の冊府元龜の刊本と寫本（八三頁下段八四頁上段）參看。

② 此の論文中藏本姓氏と略稱してゐるのは、常にB類にのみ存する所の(1)藏本姓氏、(2)初閩姓氏、(3)續閩姓氏、(4)門人、(5)兄弟侄等の姓名を列舉してある一項を指す。

③ 李少文と言ふのは李嗣京の號である。後述の如く彼は揚州府興化の人で、その末裔である前清の李福祚の述舊と言ふ

書に、先少文公嗣京（卷二蟠根述上）とあり、黃國琦の再言の中にも「壬午李少文先生按閩」の語があり、李嗣京が崇禎壬午の頃福建の巡按監察御史たりしことは後述の如くである。本稿四十五頁參看。

④ 朱印の文章は本稿四十六頁參看。

近衛本に日附けの所が落丁してゐるのは、前に指適した。板本は兩者全然同一物である。

四

同じく明刊本と考へられものに何故斯る相異が存するのであらうか。

今圖表をよく觀察してゐると、少くも此の圖表は十行本明刊元龜の二つの大きな系統を暗示してゐる様に思はれる。即ちそれはA類に屬する刊本及びB・C類に屬する刊本の二大別である。A類に屬するものは徹底的に李嗣京鑒正と言ふ主張の下に、明崇禎壬午年^(十五)刊行されたのであり、B・C類就中B類に屬するものは反對に徹底的に李嗣京を排斥する考の下に少くも甲申年^(十七)以後刊行されたのである。C類が一見中間的形態をとつてゐるのは後述する様な理由があるからで本來B類と共

に李嗣京を排除する考の下に刊行された系統に屬する可きものと思ふ^①。換言すれば此の二系統の中、A類は初刊本の系統と考へられるに對し、B・C類は再刊及び三刊以後の系統に分類することが出来るであらう。

何故に爾か言ふかとなれば、A類に屬するものは専ら崇禎壬午年の李嗣京の序文、並びに初刊本を朝廷に奉呈する時の掲帖（崇禎十五年十一月付）のみ存してそれ以後の日附けのあるものは一つもない。これA類本が崇禎壬午の初刊本の系統に屬するものたることを明示するものであらう。然るに、他のB・Cの二類は何れも年號を記してゐない黃國琦の再言が載せられ、而もその文中には、

迨甲申。余召對中左門。將自呈復痛時之已棘傷哉。

と言ふ一句あり、甲申は明かに壬午より二年後の崇禎十七年である。即ち此の再言はA類が屬する壬午刊本の初刊以後B類本が再刊行された時に、初めて黃國琦が補つて附載したものであることが判る。而して國琦は此の際、初刊本發行の時の恐らく不滿に思つてゐた點を改訂したのである。その改訂を行つた要點は次の如きものである。

(1) 文翔鳳叙を第一に附載すると共に李嗣京序、掲帖、

を排除し併せて崇禎壬午の年號ある自序を第二に列し、第三に再言を、第四に藏本姓氏を列し、更に見返しにある李少文先生鑒正と言ふ文字を削除し、冊府元龜考據の述者の姓名を自己のものに變更すると。

(2) 本文各卷初の訂正者、參閱者、較釋者の項を改造すること。

元來文翔鳳と黃國琦の關係は已に示した様に非常に親密で且つ師弟關係に立つてゐた。少くも黃氏は文氏を師と仰いでゐた^②。又彼等が冊府元龜を校合するに當つても實に二十年の長い年月を費して相協力した次第は、文叙・黃國琦再言に相表裏して述べられてゐる^③。故に順當に行けば文翔鳳叙は已に崇禎壬午刊本の時に於て正に卷頭を飾らなければならぬ脈合のものである。黃國琦もそれを庶幾したに違ひない。然るに何故崇禎初本刊の時に彼が全然退けられてゐるのであらうか。これは疑もなく李嗣京と言ふ人物が存在する爲めである。李嗣京に就いては嘉慶十五年刊本の重修揚州府志卷四十七の人物志に據ると次の様な人である。

李嗣宗（咸豐元年刊重修興化縣志卷八作李嗣京）興化人。中略崇禎元年進

士。差河東巡撫。再差按福建。中略捐刻冊府元龜進呈。差竣後還臺。乙酉（弘光元年）後杜門絕世參舊志家傳

とあり、又黃國琦の再言にも、

壬午李少文先生按閩。與胡公藥山、郭公正夫。厥削氏之披云々、

とあり、按福建とか按閩と言ふのはA類本每卷初に巡按福建監察御史李嗣京とある様に、福建地方の巡按監察御史たりしことを言ふもので、その拜命の年代は再言の文から考へれば略崇禎壬午（十五年）であつた様である。そして此の時彼は相當の金額を支出義捐して冊府元龜を刻板せしめたのである。どれ位の金額であつたか精しいことは不明であるが、國琦再言の末尾の文章を讀んでみると至仲元子眞非五十萬錢。而相及知余者。其惟揚子雲乎

と言ふ隱微なる文章あり、これこそその金額を言つてゐるもゝ様である。かゝる巨額の出費をなしてゐるが故に、彼はその代償として相當なるものを要求したらしい。即ちA類刊本に於ける李嗣京の獨舞臺的現象はその現れと見得る様で、恐らく國琦の本心に違つて校合に於ける文翔鳳訂正と言ふ二十年間の功績を默殺し、却つて

自ら獨り美名を貪り、或は見返しに李少文先生鑒正と稱せしめ、或は卷頭第一に自己の撰になる序文を載せ、又自己の名に於て朝廷に獻本し、その掲帖を安挿せしむる等凡そ譽む可らざる行爲を敢てなしたものの如くである。彼の這般の心事は、掲帖、及び近衛本見返しに押捺された奇怪なる朱印の文に遺憾なく現れてゐる。掲帖には、

昨職奉命按閩。聞有建陽縣。爲宋賢朱熹等講道之鄉。縣有書坊。自宋迄今皆爲刊刻古書之所。職因取家藏舊本。行分守建南道胡維霖轉行建陽縣知縣黃國琦釐訛補闕。職與道縣合鑄新廩。爰付棗梨云々、とあり、出板せる元龜の底本は實に自己の家藏なるが如く言ひ、それを黃國琦等に命じて釐訛補闕せしめた如く言つてゐる。これは文翔鳳と黃國琦とが言つてゐる所とは全く一致しない。文叙黃氏再言に據れば元龜刊本の底本は明かに成都楊慎の所藏たりし抄本であり、B類本の藏本姓氏に據れば左の如き原流を有するものである。

楊慎 成都人內府抄本（原本）

劉應秋 吉水人抄本。公子劉公同升借證。

孫承宗 高陽人抄本。公孫婿賈爾梅借證。

劉一燾 南昌人抄本。公次子劉斯埜借證。

傅冠 進賢人抄本借證。

曹學佺 侯官人抄本借證。

邵捷春 閩縣人抄本借證。

倪元璐 上虞人抄本借證。

朱謀舉 新建人。以內弟德安趙公帥尹抄本借證。

鄧纘皇 侯官人抄本借證。

國琦の再言にも明瞭に、

原本出成都楊氏。證本歷高陽等九氏。

とある。かくの如きにも關らず李嗣京が何ら明瞭にその自家本に對する校合の經過を報告することなくして、出刊本の底本が自家舊藏に出づるを主張するは解し難き心事である。

又例の朱印の文を見ると、

冊府一書。自有宋景德中輯成。迄今六百一十七年。

秘本傳錄。闕謬相仍。僕幼就墳索。夙時蒐羅。廿載

苦心。一無餘憾。茲恭呈天府。廣布人間。將見家修

嫗嬭。架騰奎壁矣。少文謹識。

とある。これも奇怪なる文で、第一元龜が宋の景德中に輯成したと言つてゐるのは冊府元龜考據の智識と全然一

致しない無識を露呈したものである。これから考へても考據が李氏の撰になるものでないことは明かであるが、更に迄今六百一十七年と言ふ數は極めて不可解である。

A類の初刊本は明かに崇禎壬午に出板されてゐるのであるから、李氏が今と言つてゐるのは、どうしても壬午年としなければならぬ。而し今を壬午年とすればそれから六百一十七年前は宋の眞宗の代天聖四年とならねばならぬ。此の年が元龜と何の關係もないことは明かである。

かゝる不明確は暫く問はずとするも、廿載の歲月を費して元龜を校合したるは實に自分自らであると言つてゐるのは誠に驚ろく可きことである。掲帖によれば釐訛補闕したのは黃國琦であり、A類本の每卷初によれば李嗣京は訂正したのみである。然るに此の朱印では前述の如く二十年諸本を蒐羅校合したのは自己であるとす。その言誠に信じ難い。

黃國琦は初刊本の刊行時に於ける李嗣京の斯る態度には、大に不滿を感じたことであらう。そこで彼が再刊を爲す場合には彼は斷然此の不滿を満たす様な改訂を加へたかつたであらう。即ちこれがB類本に於ける現象となつて現れたと思はれる。B類本に於ては李序及び掲帖は

全く姿を消し、その代りに第一に文叙が、第二に崇禎壬午國琦序が、第三に事の次第を記した再言が、第四に刊本の來歴を説明する藏本姓氏等の項が掲げられてゐる。そしてA類本の見返しにあつた李少文先生鑒正と言ふ文字及び、冊府元龜老據の末尾に附された李嗣京述と言ふ文字も亦不都合極まるものとして削除し、前者は空白のまゝとし後者は黃國琦述と改正したものである。

而して同じ理由によつて毎巻初にあつた訂正者、參閱者、較釋者の姓氏にも變更を施した。即ち先に述べた様にB類C類に於ては此部が全然A類のそれと趣を異にしてゐるのは、かゝる事情が伏在する爲めである。

由來戴國士を除く胡維霖、夏允彝、曹鼎臣、孫以敬の四人はB類載せられた藏本姓氏に續く初閔姓氏の項にも舉示されてゐる人々で冊府元龜の校合出刊に當つては何れも、少しは關係のあつたことは確かであらうが、而も文翔鳳を差置いてまで、校閱者の一人として其の名を掲げられる程の者でないことも亦確かであらう。胡夏曹孫及黃氏は李嗣京が福建の巡按監察御史であつた頃、何れも同じ福建の地方の官吏をして居り、李氏に對しては畏れかしこむ可き地位に立つてゐる。而して特に黃氏は元

龜の出刊に際して李氏から巨額の出捐を受けてゐるから、李氏に對しては非常に遠慮す可き立場に立たされてゐた筈である。李氏は此處に乘じて、恐らく自己の腹心であつたらう所の前記四氏をして參閱者として毎巻に刻列せられるの榮譽を荷はしめたものであらう。先に示した様なA類本に於ける參閱者の順序は餘りに非實際的ではなからうか。かゝる非實際的な參閱のやり方は恐らく行はれなかつたであらう。私はA類本の此の參閱姓氏の刻列の仕方は全くノミナルなもので、何等實際に即して記せられたものではないと考へる。即ちこれは李嗣京の意圖によつて、彼等五人の腹心が元龜校合出刊の榮譽の分前に與つたことを示してゐる以外の何者でもなからうかと思ふ。殊に戴國士の如きは國琦が補載したB類本の初閔姓氏の項にもその名の見へぬ者で、恐らく李氏一派の取巻き連の一人に過ぎなかつたのではないかとさへ考へられる。

而して國琦が再刊の時にあたつて何故かくも大改訂を行ひ得たかと言ふに、此の再刊は少くも崇禎甲申以後に行はれたものであるが、李嗣京は元龜出刊後間も無く福建の巡按監察御史の職を退き、乙酉(弘光元年)以後は世事を

絶つて郷里に隱棲^⑭して居り、最早や國琦等に對して實際の權威を失つてゐるので、そこで國琦も今や何の遠慮もなく、その欲する所に從ひ李氏の横暴を排除し得たものと思ふ。

而して先にも述べた様にC類に屬する閣本一四一八號は一見一種の中間形態の相を示し李序が猶ほ第二位に残り、藏本姓氏は缺如してゐる。その他はB類と全く同じい。これは前述の事情から考へて、決して眞にC類本がA・B類の中間に位する形態を持つてゐるのではなくて、却つてC類が三刊以後のものであるため、後人誤つて李序を復活せしめ、又藏本姓氏の項は、已に早くも原板錯落の爲めに喪失してゐるが爲めに起つた奇型とも言ふ可き形態であると思はれる。猶ほ此の點に關し後述する所を參讀せられ度う。^⑮

註

- ① 本稿四十八頁及び五十頁參看。
- ② 本稿三十八頁註②參看。
- ③ 同前參看。
- ④ 子眞は西漢末の梅福の字であらうが、此の人と揚雄との關係は予不敏にして未だこれを知らない。たゞ仲元と言ふは法言卷八淵騫篇（五臣註本に據る）に、

或人問。子蜀人也。請人。曰有李仲元。吳秘注李仲元其
名弘見秦宓傳
爲人也奈何。曰不屈其意。不累其身。曰是夷惠之徒歟。曰不夷不惠。可否之間也。

とある人で、雄は李仲元が時の義に隨ふこと風の如きものあるに傾倒し、伯夷や柳下惠より高次の人格者であるとしてゐる。黃國琦は此の故事を援用し、仲元を揚雄が推賞してゐるの決して、自分の場合に於ける如く五十萬錢等と言ふ金錢の問題と比較になる話してはないのだが、而し時の宜に従つて前には李嗣京に従ひ、今は之を排する心持ちは揚雄の如き人のみが知る所だらうと言ふ隱微の言である。五十萬錢は、どうしても李嗣京捐出の元龜出刊費と解す可きものゝ様である。

⑤ 此の抄本が文翔鳳の手に渡つた經過は文叙に詳しい。又本稿三十九頁註⑤參看。

⑥ 冊府元龜考據には玉海、文獻通考を引いて、此の書が宋の景德二年九月より凡そ八年にして完成し、大中祥符六年八月王欽若等之を朝廷に奉獻した次第を述べてゐる。

⑦ 黃國琦の校合者としての功績は李嗣京と雖も無視出来難かつたであらう。故にA類本に毎卷初には知建陽縣事臣黃國琦較釋と堂々署名せしめてゐるのである。故に國琦の崇禎壬午序文も、初刊本の時彼が掲載しやうと欲しきへすれば、掲載出来たものではなからうかと思ふ。事實掲載する考へで已に壬午年に成稿があつたであらうが、やはり李氏に對する慮りから、之が掲載を躊躇したものであらう。B類本刊行の時には斯る事情は最早や存しなかつたので、その成稿を當時の年號のまゝ掲載したものだと思はれる。

⑧國琦は此の藏本姓氏並び初閣續閣諸氏の姓名を列挙することによつて、その刊行本の原流を明かにせんととの意圖を有してゐた。そのことは彼の再言の中に、

原本出成都楊氏。證本歷高陽等九氏。昔漢鐘興以經學顯。

而必表其所自出於丁恭之門。歐宋同創唐書。循例歐獨署名

乃曰宋公於我爲前輩。且用力於此書甚深。何敢沒也。因並

署焉。則余之更定較閱姓氏。步鍾涉歐。不敢負本事也。云々

とあるに依つて知られる。藏本姓氏等の項に李嗣京の所藏

本に關して、一言もふれてゐないのは宣なる哉と思はれる。

前引文の續きに至於仲元子眞云々と極めて隱微の言を

述べてゐるのは李嗣京排斥の隱されたる爪であると思ふ。

猶本章註④參看。

⑨本稿四十二頁參看。

⑩内閣文庫に二種の明抄本があるが、その一方に冊府元龜考據

が存し、それは全然明刊本と同一のものである。杉本氏は兩

者に存する此の考據はその内容の構成から考へて何等黃國

琦述を俟つまでのものでないとした。(史學研究第七卷第

二下段)私は刊本考據と抄本考據との關係を、速斷し兼ねる

のであるけれども單に推測だけを許され、抄本考據は恐

らく刊本考據によつて、後から補はれたものではないかと思

ふ。若し此の考へが許されば明刊本の考據は恐らく國琦

の手によつて編纂されたものであらう。

A類本の考據述者が李嗣京となつてゐるのは、已に述べた様

に全く李嗣京の惡趣味に出たものである。

⑪本稿四十二頁—三頁參看。

⑫胡維霖新昌人、夏允彝喜善人、曹鼎臣如皋人、孫以敬太倉

人とあり。

⑬本稿四十二頁—三頁參看。

⑭本稿四十四頁引用揚州府志の文參看。

⑮本稿四十三頁—四頁參看。

⑯本稿五十頁參看。

五

元龜の明板出刊に際しては、如上の様な事實が存してゐるのであるが、國琦はB類本の刊行に當つて内容に關しては毫もA類本を改訂する所がなかつたから、初刊本と再刊本との間に、内容的相異は先づ絶無と斷定出来る様と思ふ。勿論毎卷々頭の參閱者。訂正者。校釋者の項を改刻する爲めに、毎卷の第一葉本文はA類本を摹刻してあることは事實であるが、それが爲めに本文が變改されてゐることは、先づ無い様である。而しA類本は初刊本であり、又大部分はB・C類及び清代の諸重刊本の原板であるし、現存の數も非常に少ないと言ふ點で尊重するに足るものである。A類本が所藏されてゐる所は寡聞にして餘り知らないものであるが、恐らく我邦では靜嘉堂及び近衛文庫位のものであらう。民國では現存してゐないのではないかと思ふ。

而して黃國琦のB類本によつて面目を改めた明刊の原板は、清時重刊本なる康熙壬子刊本の黃九錫の跋に従へば、庚子即ち明の永曆十四年に火災に遭つた爲め錯落するものが多かつた。九錫等は之を補綴して所謂康熙刊本を出刊した。内藤戊申君及び私が冊府元龜の外臣部、奉使部の索引編纂の爲めに用びた底本は、内藤博士の所藏にかゝる康熙刊本であつた。而し此の本は時々缺板が存する様である。例へば外臣部第九百八十六卷の第二十五葉は缺失してゐるが、これは東方文化學院京都研究所々藏の康熙刊本に於ても、同じく缺失してゐるので、決して單なる落丁の類を以つて考ふ可きではない。これは正に原板そのものゝ缺落であらう。かゝる原板の錯落缺失は其の後も大いに發生したらしく乾隆重刊本に寄せた丁序賢の小引にも、

今年（乾隆甲戌）夏薄遊金陵。於舊書肆中。見殘缺數

本。問所從來則曰黃氏之子孫自吳門負茲板。以求售者五年矣。時坊友王君勝鳴中略盡以半價質之。俾得復還其子孫。迨板歸坊後。失去者百數十篇。其中蠹蝕殘缺者不可勝計云々、

とあるのは、以つてそれを推測するに足る。乾隆重刊本

はかゝる殘缺本を補刻増修したものであるが、内容を見てゐると往々A類の初刊本を摹刻したものが挿入されてゐて、黃國琦がB類刊行の時削つた各卷初の參閱者の名が、此の重刊本にそのまゝ現れてゐることがある。たとへば京大東洋史研究室所藏の乾隆重刊本では、第四卷第五卷及び第三十二卷下等はそのほんの一例である。このことは早く已に岡本況齋も記してゐる所であるが、而し氏は未だこれがA類本の摹刻に由來することには氣付いてゐないし、且つ氏はたゞ第三十二卷下の一條にのみ注意して他には言及してゐない。而し氏がもつと多く他の部分を檢覆したら猶ほ幾つも此の例は發見されたであらう。

而して清時の康熙・乾隆重刊本に就いて注意す可き點は、藏本姓氏の項が全然缺如してゐること及び李嗣京の掲帖が再び蘇生して復刻されてゐることである。藏本姓氏の項の錯落は已にC類に屬するもの、恐らく第三刊以後の系統の頃から始つたらしい。故にCに屬する閣本一四一八號にはそれを缺き以後永久に消失してゐる。又李氏の掲帖が復活してゐるのは、これもその前兆は已に三刊以後の系統に屬するC類本あたりから著れてゐる様で

ある。と言ふのは一旦排除された李氏の序文がC類に復活してゐる如きがそれで、年月の経つまゝに、黃國琦が李序、李氏掲帖、見返しの肩書等一般に李氏の名を排除した理由が忘れられ、後人無識、無知の間に之を復活したものであらう。現に黃九錫の如きは李少文と文太青の區別さへつかず、李太青と言ふ珍妙な人物を作り上げてゐる。^②これ如上の推測を可能ならしめるものである。故に國琦がかつて不都合極まるものとして排除した掲帖が清重刊本に再び蘇生復刻されてゐるのも、斯る所にその事情がひそんでゐるのであらう。

註

① 靜嘉堂文庫所藏。岡本況齋先生遺稿「冊府元龜顛末攷」(寫本)

② 康熙壬子刊本の黃九錫跋に上略石公叔曰……惟冊府一書會同李太青先生校正辯訛云々と言つてゐる。

六

明刊本元龜は初めから五繡堂と言ふ書肆による坊刻本であつて、A類に屬する近衛本の見返しには五繡堂梓と刻してある。五繡堂が如何なる書肆かはつきりしないけれども李嗣京の掲帖に、

聞有建陽縣中略縣有書坊。自宋迄今皆爲刊刻古書之所。

とある文が信ぜられ、且つそれが此の五繡堂を指すとすれば五繡堂と言ふ書肆は非常に古るい店であることが判る。B類の再刊も亦五繡堂で行はれたことは、閣本のB類本の見返しからでも明かであらう。而るに先にも述べた様に明の永曆十四年に書肆が火災の厄に遭ひ板木も素より焼失するもの多かつたが、書肆即五繡堂其ものも大打撃を蒙つたらしく、康熙重刊本なる閣本書番一六六九號一六二二四號の見返は全然初刊再刊當時のものと異つて居り、名義は依然五繡堂の藏板となつてはゐるが、發兌は全然別個の書肆である。即ち一六二二四號の見返し右傍下部には、

姑蘇閶門月城內遺經堂書坊發兌、

と言ふ朱印が押されてゐる。これは一六六九號の方には、全然無いけれども、此の押印によつて考へられる事は少くも一六二二四號の一屬以後刊本の出る頃には、五繡堂は已にその元龜發兌の權利を喪失する程に零落してゐたものであらうと言ふことである。先に引用した邵亭知見傳本書目(卷十)に冊府元龜に就いて康熙壬子五繡堂

